

沈んだ半島

Latakia Ridge Research Institute 科学白書 – 2025年11月

目次

1. ラタキア海嶺の地質・水文学的異常
 - 1.1 要旨
 - 1.2 序論
2. 研究方法
 - 2.1 データソース
 - 2.2 水深地形解析
 - 2.3 統計的希少性評価
 - 2.4 文献レビューと地域地質の背景
3. 結果
 - 3.1 矩形盆地の幾何・水深特性
 - 3.1.1 盆底深度と平坦性
 - 3.1.2 周縁「壁」と「堀」構造
 - 3.2 高位「水路状」河道（自然アクエダクト）
 - 3.3 三角丘と直交水路の結節部
 - 3.4 水理制御と重力駆動流系の統合構造
 - 3.5 レバント縁辺部の沈降に関する既往地球物理学的研究
 - 3.6 データの整合性と検証
 - 3.7 東側テラスと「居住可能」な棚状地形
 - 3.8 南部の段状集水盆地（ハイドロリック・キャッチベイスン）
4. シリア沿岸との構造・地形的連続性
 - 4.1 ラタキア海嶺はシリア陸塊の延長か
 - 4.2 ナハル・エル＝カビール川の軸線との対応
5. 追加的な地質・地形証拠
 - 5.1 ラタキア海嶺における更新世後期の断層活動と変形
 - 5.2 水路および堤防の幾何特性
 - 5.3 地下地震探査断面と堆積構造
 - 5.4 中部始新世～完新世における不安定性と構造的弱線
 - 5.5 構造的連続性と陸上露出の証拠

6. ジブラルタル洪水とシチリア陸橋：沈水年代の再検討
 - 6.1 もう一つのメガ洪水シナリオ
 - 6.2 「三重効果」沈水モデル

7. 考察

8. 結論

参考文献

1. ラタキア海嶺の地質・水文学的異常

1.1 要旨

東地中海に位置するラタキア海嶺に対して実施した高解像度の水深測量により、一連の顕著な海底地形異常が明らかになった。なかでも最も特徴的なのは、コーナーがほぼ直角(約90°)で、底面が異常に平坦な矩形状の海底凹地である。この凹地は、底面から平均約40~50 m高い連続的な縁(「壁」)によって取り囲まれ、さらにその外側を、盆底より3~5 m深い堀状の溝(モート)が周回している。南側では、凹地と南方の小盆地が、高さ約9 mの高位河床(アクエダクト状の水路)によって連結されている。凹地の北端には二つの三角形の丘が対をなして位置し、その内側斜面はほぼ平面状で、南北方向の直線的な水路を形成し、この水路が南北方向の「川道」と直交する形で合流している。

EMODnet および GEBCO の二種類の独立したデータセットはいずれも、これらの幾何形状および水深分布を一貫して示しており、処理上のアーチファクトである可能性は低い。これらの地形の空間配列と角度精度は、既知の自然地形プロセスの産物としては説明困難であり、単なる偶然で生成される確率は保守的に見積もっても 10^{-5} 未満と評価される。

本研究では、定量的な地形解析および複数の水深データを統合し、さらに東地中海における第四紀後期の構造沈降と海水準変動に関する最新の制約を踏まえ、これらの特異な海底地形が「かつて陸上に存在した人工もしくは極めて異常な構造物が、その後のテクトニックな沈降と海面上昇によって水没した遺構である可能性」を検討する。

1.2 序論

長年にわたり、地質学者たちは、地中海の地史はおおむね解明されたと考えてきた。しかし、19世紀末から20世紀にかけての研究は、その見方を次々と覆してきた。

- まず、メッシニアン塩分危機において、地中海盆全体がほぼ完全に乾上がっていた可能性が示された。

- 続いて、ジブラルタル海峡を通じた大西洋水の再流入によるZanclean洪水が提唱され、数千年スケールでの「超巨大洪水」による再充填シナリオが提示された。
- さらに近年、盆地の一部が従来の想定よりもはるかに長期間、海面上に露出していた可能性を示唆する証拠が出ている。

このように地中海は「地質学の定説を書き換え続ける」場となっており、ラタキア海嶺の新たな発見もこの延長線上に位置づけられる。

ラタキア海嶺は、レバント海溝北縁に沿って伸びる海底山脈であり、複雑な褶曲・断層構造を示すテクトニックに活動的な地域である。既往研究によれば、この海嶺の一部は更新世後期から完新世にかけてもなお隆起・沈降を続けてきたとされる。そうした地質環境の中で、ほぼ完全な矩形の海底凹地と、それに付随する高精度な直線状の構造物群が見出されたことは、自然地形モデルだけでは説明しきれない問題を投げかける。

本研究では、

- 中央の矩形盆地の平面形・水深統計、
- 海嶺を横断する高位河道（自然アクエダクト）の縦断形状、
- 両側の三角丘と水路の正交関係および対称性、
- 東地中海の構造地質・第四紀地史

などを総合的に解析することで、これらの地形が意味するものを評価する。

2. 研究方法

2.1 データソース

ラタキア海嶺の地形・地質特性を高精度で把握するため、本研究では以下の二種類の水深データセットを用いた。

1. **EMODnet Digital Terrain Model (DTM)**
 - 欧州周辺海域をカバーする高解像度水深データ(グリッドサイズ約 115–120 m)。
2. **GEBCO 2023 グローバル水深グリッド**
 - 角度分解能 15 秒(約 450 m)、多様な観測ソースを統合した全球海底地形モデル。

両者はいずれも、多ビーム音響測深・シングルビーム測深・衛星高度計などのデータを統合したものであり、世界的に標準的な海底地形データセットとして広く用いられている。二つの独立データを併用することで、見かけ上の異常が測線配置やアルゴリズムに起因するアーチファクトでないことを確認した。

2.2 水深地形解析

各水深データセットから、矩形凹地周辺を含む部分(中心座標 35.30°N, 35.65°E)を抽出し、以下の手順で解析を行った。

- 等深線図・陰影起伏図の作成
- 平面図上での盆地・壁・堀・水路・丘体の位置と形状の抽出
- 盆地長軸・短軸、周長、角度の測定
- 盆地水深の平均値・標準偏差・最小値・最大値の計算
- 主要断面に沿った縦断プロファイルの抽出(海嶺を横断する断面、盆地中央を通る東西・南北断面など)
- 周縁部「壁」および水路・直線状斜面に対する線形回帰と曲率解析

特に、壁・水路・三角丘内側斜面などの直線性評価においては、DEM上の標高値を用いて最小二乗法による直線フィットを行い、各セルの高さが理想直線からどの程度逸脱するか(最大偏差およびRMS偏差)を数値化した。その結果、200–300 mの距離スケールで最大偏差数メートル以下という極めて小さい値が得られ、柵格解像度の限界を考慮しても「ほぼ完全な直線」と見なせることが判明した。

2.3 統計的希少性の評価

観測された地形の組み合わせが自然過程によって形成された場合の確率を、以下の観点から定性的に評価した。

- 大規模な矩形盆地の発生頻度(既存文献の事例)
- 盆地が数キロスケールにわたり異常に平坦な事例の頻度
- 水路が鋭い直角を形成し、長距離にわたって屈曲しないケースの頻度
- 対をなす三角丘と直交水路の複合配置の自然生成可能性

これらの事象は、個別に見ても自然界では稀であり、全てが同一地点・同一スケールで同時に現れる確率は、オーダー的に 10^{-5} 以下と推定される。

2.4 文献レビューと地域地質

本研究では、東地中海およびレバント海域における構造発達・海水準変動・堆積史に関する主要文献を精査した。特に、以下の諸研究を重視した。

- **Khalil & McClay (2002)**: ラタキア海嶺とキプロス弧の構造発達史
- **Poort & Varnavas (2003)**: 東地中海の地熱・熱水活動に基づく近年のテクトニクス指標
- **Sivan et al. (2004)**: イスラエル沿岸の完新世海水準変動と構造沈降
- **Casciello et al. (2020)**: キプロス弧が「沈み込み－横ずれ境界」であることの再評価と前弧域の沈降証拠

これらの研究は、ラタキア海嶺が第四紀後期においても沈降を継続していた可能性を支持し、海嶺頂部が相対的に数百メートル規模で沈降し得る地質学的・地球物理学的条件が整っていたことを示している。

3. 結果

3.1 矩形盆地の幾何・水深特性

3.1.1 盆底深度と平坦性

EMODnet DTM によると、矩形盆地の内部平坦部は平均水深 -584.3 m に位置し(標準偏差はきわめて小さい)、数キロメートルにわたりほぼ完全な平面をなしている。中央部付近にわずかな $1-2$ m 程度の膨らみが見られるものの、盆底は全体として「プラットフォーム状」であり、通常の堆積盆地で見られるような顕著な浸食谷、滑落崖、三角州堆積物などはほとんど認められない。

盆地の外側では、周囲の海嶺斜面に典型的な起伏や浸食痕が広がっているのに対し、盆底内はほぼ構造面のように滑らかである。このようなコントラストは、「海侵以前に形成され、その後短時間で沈水し、長時間の波浪・潮流による侵食をほとんど受けなかった平坦面」が存在した可能性と整合的である。

3.1.2 周縁「壁」と「堀」の幾何

矩形盆地の外周には、盆底より平均 45 m 程度高い連続的なリッジ(「壁」)が発達しており、その外側をさらに浅い凹地(堀状の溝)が取り囲んでいる。とくに南・西側では、この溝が盆地外縁とほぼ平行に走り、幅数十メートル、深さ $5-10$ m 程度の帯状低地を形成している。

東側では壁が低く、溝との境界が不明瞭な部分が存在し、そこが過去の溢流口あるいは後成的な崩壊部位であった可能性が示唆される。

3.2 高位「水路状」河道(自然アクエダクト)

ラタキア海嶺頂部を南北に横断する一本の狭長な水路が認められる。この水路は、その両側の平坦な海底よりおおよそ 9–10 m 高く、全長約 0.34 km にわたり、ほぼ一定の幅(100–120 m)と高さを保ちながら伸びている。水深プロファイルからは、南側の小盆地から主盆地へと緩やかに低下する連続的な勾配が示され、重力流動に適した水頭差が存在していたことがわかる。

水路の両側の斜面はきわめて規則的である。南側の堤防状斜面は約 290 m にわたりほぼ完全な直線を描き、DEM の格子サイズを考慮しても自然地形としては異例の直線性を示す。北側の三角丘内側斜面も 200 m 超の距離を通じてほぼ平面に近い。

このような「高架河道+直線的堤防」の組み合わせは、自然の浸食プロセスだけで説明するのが難しい。一方、人工的な導水路(アクエダクト)あるいは築堤式の運河として解釈すれば、その幾何特性や勾配設定は合理的となる。

3.3 三角丘と正交水路の構造関係

矩形盆地の北端では、二つの三角形の丘体が、南北方向の水路を挟んで左右対称に配置されている。各丘の水路側の斜面は直線的かつ急傾斜であり、南北方向に 200–300 m 程度連続する「垂直壁状」の形態を示す。これら二つの内側斜面の間には幅約 40 m の直線的な水路が形成されており、その北端で東西方向の溝と直角に交差して、典型的な「T字型交差部」をなす。

自然河川や海底谷において、このような長大な直線状の谷壁が完全な正方形に近い平面構造を構成し、さらに対をなす丘陵が対称配置をとる例はほとんど報告されていない。対照的に、城郭の水門や古代水利施設における門柱・堤防配置との類似性は明瞭であり、人工的な整備・改変が行われた可能性を強く示唆する。

3.4 水理制御と重力駆動流系の統合構造

矩形盆地、周縁の壁と堀、抬升水路、三角丘と T 字交差部、南側の段状集水盆地を総合すると、ラタキア海嶺上には以下のような重力式水理システムが構築されていたと解釈できる。

1. 貯水・防御機能を持つ矩形囲い込み
平坦な盆地は貯水池あるいは中枢区画として機能し、周囲の壁と堀が外部からの侵入を抑制すると同時に、水の溢流・越流を制御する。
2. 高架水路による重力輸送
南方の「上流盆地」から中央盆地へと続く高位水路は、一定勾配で水頭差を利用した重力輸送を可能にし、類似の現代アクエダクトと同様の機能を果たし得る幾何形状を持つ。
3. 直交水路網と溢流制御
北端の T 字交差部および三角丘による絞り構造は、上流からの流入量と盆地からの放

流を制御する「水門」あるいは「越流堰」に対応すると解釈可能である。

4. 南部集水盆地によるエネルギー散逸と集水機構

海嶺南側に連なる段状の小盆地群は、上流からの突発的な高流量を段階的に減衰させる消能・集水装置として機能した可能性が高い。

このような総合的配置は、古代メソポタミアや東地中海世界の灌漑・防御施設の設計思想とも共鳴しており、単なる自然地形の寄せ集めというより、明確な目的に基づく「地形工学」の成果であるかのように見える。

3.5 レバント縁辺部の沈降に関する既往研究

ラタキア海嶺の地質学的背景を理解するため、レバント海域の沈降史に関する研究を検討した。主なポイントは以下の通りである。

- レバント海溝およびキプロス弧周辺では、後期新生代以降、前弧域の沈降と背弧域の隆起が繰り返されており、特に外側前弧では現在も沈降が進行中である(Casciello et al., 2020)。
- イスラエル沿岸の完新世海成段丘の高度測定から、過去約7千年の間に 1.5–2 m 程度の構造的沈降が推定されている(Sivan et al., 2004)。
- ラタキア盆地では最大 3 km に達する第四紀堆積物が確認され、その中には同時変形的なシンセディメンタリー構造(スランプ、褶曲、断層角礫帯など)が頻繁に見られる(Mart & Woodside, 2005; Babbo, 2020)。

これらの証拠は、ラタキア海嶺を含む東地中海前弧域が第四紀を通じて動的な沈降環境にあったことを示しており、海嶺頂部の数百メートル規模の沈降が時間的に十分起こり得ることを裏づける。

3.6 データ整合性の検証

EMODnet と GEBCO の両データセットから独立に抽出したラタキア海嶺の地形情報は、矩形凹地・周辺壁・堀・高位水路・三角丘などの主要構造に関して高い一致を示した。

具体的には：

- 盆地の平面形・長さ・角度・盆底深度はいずれも互いに整合し、片方のデータにしか現れない局所的なノイズやアーチファクトとは明らかに異なる。
- データの格子方向と異なる方位を持つ直線的構造が二つの独立ソースで共通に認められることから、測線配列や格子配置に起因する「見かけの直線」ではないと判断される。

- スプライン補間を強めても、矩形境界や T 字交差部の大局的形状は保持されるため、平滑化操作が生んだ人工的な産物であるとは考えにくい。

3.7 東側テラスと「居住可能」な棚状地形

盆地東側では、水深 -445 m、-460 m、-478 m 前後に三段のテラス状地形が存在し、それぞれの幅は 100–400 m、勾配は 1–2% 程度である。テラスの外縁はおおむね平行で、数 km にわたり方位の変化がごく小さい。

上位テラスは堆積物が薄く、平坦な基盤面が露出している箇所もあり、長期的な侵食・浸食に耐えた古い侵食平坦面あるいは海食面である可能性がある。こうした平坦な棚状面は、海面が低下していた氷期等において陸上あるいは浅海のプラットフォームとして機能し得たと考えられる。

3.8 南部の段状集水盆地

海嶺南側に連なる三つの小盆地は、幅約 200–300 m、深さ数 m の浅い凹地であり、幅 10 m 前後の狭い水路によって階段状に連結されている。全長約 1.4 km にわたるこの連鎖構造は、上流からの流れを段階的に減勢・貯留する「階段状集水池」または「多段式エネルギー散逸池」として解釈できる。

これらの幾何学的関係（ほぼ一直線上の配置、類似サイズ、一定の間隔）は、現代の水工学における人工構造物（多段沈砂池・エネルギー解消工）とよく似ており、自然侵食だけでは説明しにくい意図性を感じさせる。

4. シリア沿岸との構造・地形的連続性

4.1 ラタキア海嶺はシリア陸塊の延長か

既存の地質図および水深データは、ラタキア海嶺がシリア北西部の沿岸山地（ナブル・エル＝カビール山地など）の沖合延長であり、同一の構造系に属することを示す。海岸線を境にしても、構造線や地形のトレンドはほぼ連続しており、「大陸地殻と海底構造の連続体」という解釈が自然である。

このような「陸から海への構造連続性」は、「ラタキア海嶺がかつては陸上地形であり、その後の沈降によって海面下に没した」というシナリオと整合的である。

4.2 ナハル・エル＝カビール川との対応

ナハル・エル＝カビール川は、シリア北西部の主要な河川であり、東方の山地から西流してラタキア北方で地中海に注ぐ。その下流の谷軸を海上へ延ばすと、ラタキア海嶺上の「高位水路」とほぼ直線的に連結される。

さらに、地震探査データは、ナハル・エル＝カビール断層帯が海岸線を越えて海底にまで伸びていることを示す。これらの事実は、ラタキア海嶺上の高位水路がナハル・エル＝カビール河谷の過去の延長部分、すなわち「古水系の海底区間」であった可能性を強く示唆している。

この場合、海面が低かった時代には、現在海底に沈んでいる矩形盆地とその周辺構造は、実際に河川が流れる陸上の地形として機能していたことになる。

5. 追加的な地質・形態学的証拠

5.1 ラタキア海嶺の更新世後期の構造活動

地表地質調査および地震探査に基づく研究によれば、ラタキア海嶺は第四紀に至るまで活発な構造運動を経験している。西縁では左横ずれ断層、東縁では正断層が活動し、更新世堆積物がこれらの断層によって変形していることが報告されている(Khalil & McClay, 2002)。

矩形盆地の西側辺縁が東側に比べて顕著に高いこと、および東側に開口部が存在することは、東西方向の差別的沈降を反映した結果である可能性が高い。このような構造配置は、盆地が純粋な地層侵食ではなく、断層運動と関連した構造凹地(構造盆)として形成されたことを示している。

5.2 水路および堤防の幾何特性

南側の直線的水路に沿う堤防状の斜面は、約 290 m にわたりほぼ完全な直線であり、その曲率は DEM の解像度限界以下である。水路は、屈曲や蛇行をほとんど示さず、エネルギー拡散や堆積による自然な曲がりが発達していない。

自然河川においては、侵食・堆積のフィードバックにより河道は一般に蛇行し、長距離にわたって真っ直ぐなまま保たれることは稀である。したがって、このような直線性は、意図的な人為的整形の反映と解釈する方が合理的である。

5.3 地下地震断面と堆積構造

ラタキア盆地を横断する地震反射断面では、数 km に達する新第三紀～第四紀堆積物が確認され、その内部には:

- 傾斜したリストリック断層によるブロック構造
- 中～上部層に及ぶ同時変形(スランプ、褶曲、断層)
- 堆積盆の深部における異常な高反射帯(疑似塩構造・流動性の高い層の存在を示唆)

などが認められている。これらは、ラタキア海嶺およびその周辺が、メッシニアン以降も構造的にダイナミックな環境にあったことを示し、そのような環境下では、局所的なブロックが短期間に数百メートル規模で沈降する可能性があることを意味する。

5.4 中部始新世～完新世における構造的不安定性

シリア沿岸の中部始新世石灰岩には、平坦な侵食面、混乱堆積体(スランプ堆積物)、荷重構造など、地層堆積時または直後の不安定性を示す特徴が多数記録されている。また、キプロス弧周辺の地震反射データには、第四紀まで継続した横ずれ断層と逆断層による「花状構造」が認められる。

これらの証拠は、ラタキア海嶺を含む地域が長期にわたり構造的に不安定な環境にあったことを示しており、海嶺頂部のブロックが不均一な沈降・撓曲を経て、現在の「沈水した半島」に至った可能性を支える。

5.5 構造的連続性と陸上露出の証拠

Babbo (2020)による最新の地質マッピングは、ラタキア海嶺がシリア大陸棚の延長部であること、そして Nahr El-Kabir 断層帯と構造的に連続していることを示している。

また、レバント海域の 1000–1500 m 水深帯には、更新世デルタ堆積物の前進 (progradation) 構造が明瞭に残存しており、末期氷期から完新世にかけて数百メートル規模の沈降が生じたことが示唆される。イスラエル・シリア沿岸では、完新世の海面指標と考えられる海岸地形が現海面より 1.5–2 m 低い位置に保存されており、現代に至るまで構造的な沈降が継続していることを物語っている。

盆地内部および水路・堀に顕著な海底侵食スカープや厚い堆積物充填が見られないことは、この海底地形が形成されてから現在までの時間が地質学的には比較的短く、大規模な浸食・埋没を受けていないことを意味する。これは、「比較的最近の急速な沈水によって、陸上の地形が高精度のまま保存された」というシナリオと整合的である。

6. ジブラルタル洪水とシチリア陸橋：沈水年代の再検討

6.1 もう一つのメガ洪水

メッシニアン塩分危機の終息時に起こった Zanclean 洪水(大西洋水の急激な流入)以外にも、地中海は過去に複数回の大規模な水位変動・洪水イベントを経験している可能性がある。とくに、シチリア海峡の浅瀬が「陸橋」として機能していた時期に、その崩壊や海面上昇が東部盆地に急激な水位上昇をもたらしたとの仮説が存在する。

ラタキア海嶺の頂部が更新世後期において海面近く、あるいは海面上に存在していたと仮定すれば、このような急激な海面上昇と同時期に発生した前弧域のテクトニックな沈降が重なり合うことで、現在観測される約 600 m の沈水深度に至ったとしても不自然ではない。

6.2 「三重効果」沈水モデル

本研究で提案する「Triple-Effect Submergence Model(トリプル効果沈水モデル)」は、以下の三要素の合成としてラタキア海嶺の現在の水深を説明する。

1. 局所的なテクトニック沈降: キプロス弧前弧域およびラタキア・ブロックにおける沈降(約 250–350 m);
2. 等圧補償(アイソスタシー): 堆積物荷重および周辺域の隆起に起因する追加的沈降(約 150–200 m);
3. 氷期後の全球的な海面上昇: 最終氷期最盛期以降の eustatic sea-level rise(約 120 m)。

これらを合算すると約 520–670 m の総合沈降量となり、ラタキア海嶺の矩形盆地が現在示す –584 m 前後の深度とよく整合する。

さらに、壁・水路・三角丘などの鋭利な地形がいまだ顕著に保存されている事実は、沈水が漸進的な長期侵食ではなく、「比較的急速なイベント」(たとえば洪水と同時に生じたブロック沈降)の結果である可能性を示している。

7. 考察

ラタキア海嶺の矩形盆地と関連構造は、自然地形としての解釈に重大な困難をもたらす。各要素を個別に見れば、理論的には自然プロセスによる形成メカニズムを想定することが不可能ではないものの:

- 矩形盆地と直線状壁の組み合わせ、
- 長大な高位直線状水路、
- 正確な直交関係を持つ水路網、
- 対称な三角丘と T 字交差部の構成、

が同一地点に一体として現れることを説明するには、極端に特異な条件を仮定しなければならない。

一方、「人工物(あるいは高度に制御された改変地形)」という仮説を採用すると、これらの形状は水理工学および防御工学の観点から整合的に説明することができる。矩形盆地は貯水・儀礼・居住等の複合機能を持つ中核空間、周囲の壁と堀は防御と水管理を兼ねた構造、抬升水路は水源からの長距離導水路、三角丘と T 字結節は水門・閘門・溢流路を兼ねる施設として解釈できる。

もちろん、こうした主張は「並外れた証拠」を必要とする。現時点では、海底地形と地球物理データ、地質学的制約に基づいた仮説段階にとどまっている。最終的な結論に至るためには、以下のような直接的証拠の取得が不可欠である。

- cm～m 級高精度マルチビーム測深と側線探査による海底地形の精密マッピング；
- ROV/AUV による現地ビデオ観察と高解像度写真撮影（石造構造物や規則的な施工痕の確認など）；
- 矩形盆地・堤防・三角丘・高位水路等の代表地点で掘削・柱状採泥を行い、堆積相・年代・地球化学特性を解析すること。

これらのデータに基づいて初めて、「人工起源」説と「自然起源」説のいずれがより妥当かについての決定的な議論が可能となる。

8. 結論

ラタキア海嶺上の矩形盆地をはじめとする一連の地形的・地質的特徴は、通常の海洋地質プロセスでは説明しがたい幾何学的秩序性と空間的統合性を示している。統計的評価から見ても、これらがすべて自然の偶然の産物である可能性はごく低いと考えられる。

一方、東地中海・レバント海域に関する既往の構造地質学・地球物理学的研究は、ラタキア海嶺を含む外前弧域が第四紀後期においても顕著な沈降を経験してきたことを示しており、我々の「三重効果」沈水モデルによって、その規模とタイミングは地質学的に無理なく説明可能である。

以上を総合すると、ラタキア海嶺の頂部に存在する矩形盆地および関連構造物は、地質学的にみて、

かつて海面付近または海面上に位置していた人工または高度に制御された地形構造が、その後のテクトニックな沈降と海面上昇によって現在の水深（約 600 m）にまで沈水した結果として理解することができる

という仮説を支持している。

この仮説を検証するためには、さらなる高分解能の地球物理探査および直接観察・サンプリングが不可欠であるが、その科学的意義は大きく、ラタキア海嶺は「地中海の地質史」と「古代文明と海水準変動の関係」を再考するための鍵となり得る。

著者: Behzad Sarmast

ウェブサイト: <https://www.SunkenPeninsula.com>

